

「トウキデイデスの罫」 その二 戦争へ発展

松浦 純子

「トウキデイデスの罫」とはグレアム・ハリソンの造語で、従来の覇権国と台頭する新興国が、戦争不可避な状態にまで対立する現象を意味する。彼によると、過去五百年間に新興国が覇権国を脅かした例は十六例あり、そのうち十二例が戦争に発展したとある。

その十二例中、十七世紀末から十八世紀半ばの一連の戦争と、十八世紀末から十九世紀初めの一連の戦争をイギリスとフランスの立場から見たい。これらの戦争は両国から見ると第二次百年戦争に当たる。第一次の百年戦争は十四世紀半ばに始まり、イギリスが敗北してヨーロッパ大陸から撤退した。

しかし、そこから二百数十年の間にイギリスは軍事力、経済力をつけ国力を強めて、再びヨーロッパ大陸に登場した。そして、イギリスとフランスは戦争毎に敵対した。もちろん第一次のように二か国だけの戦争ではなかったし、また、イギリスは戦争の原因を作った国でもなかった。しかし、十六世紀の大航海時代の後ゆえ、ヨーロッパ諸国の関心は世界中に広がり、植民地を得るためにアジア・アメリカでも戦火を交えた。

十七世紀末からの戦争では次の四つの戦争が有名である。まず、覇権国フランスのルイ十四世が領土継承権を主張したファルツ戦争と、孫をスペイン王に即位させたことから始まったスペイン継承戦争。いずれも勝者は新興国イギリスである。次に、オーストリアとプロイセンの争いに便乗したオーストリア継承戦争と七年戦争。フランスは両国がある神聖ローマ帝国と地続きのため、すぐに反応して戦ったが敗北した。七年戦争で勝者となった島国イギリスは多くの海外植民地を持つことになり、覇権国の地位を不動のものにした。

ところが、再び覇権を狙うフランスは十八世紀末から、オーストリアに宣戦してフランス革命戦争を起こし、さらにナポレオンは連戦連勝を重ねてヨーロッパの大半を支配下に置いた。この二つの戦争でイギリスは覇権を維持するために自ら対仏大同盟を結成して最終的にフランスに勝利した。

イギリスが勝利できたのは、地続きの国にはない島国の利点を活かしたことも一因だと思う。